Ⅱ　幼児教育と小学校教育の円滑な接続をめざして

1　接続期カリキュラムが重要視される理由

幼児教育から小学校教育への移行における課題

幼児教育と小学校教育との接続においては、遊びや生活を中心とする幼児教育と教科等の学習を中心とする小学校教育とでは教育の内容や方法が異なるため、それが大きな環境の変化としての段差となり、スムーズに適応できない児童が出現すると指摘されています。

こうした状況の中、幼児教育と小学校教育における教育内容や方法を十分理解した上で、保育者は「今の学びがどのように育っていくのか」を、小学校の教員は「今の学びがどのように育ってきたのか」を見通した全体的な計画（教育課程を含む）及び教育課程の編成・実施が求められます。

保育者や小学校の教員は、それぞれ発達の段階を踏まえて保育・教育を充実させることが重要であり、一方が他方に合わせるものではないことに留意する必要があります。

接続期カリキュラム

接続期カリキュラムとは、幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るために作られるカリキュラムのことです。小学校教育に向かう幼児期の全体的な計画（教育課程を含む）「アプローチカリキュラム」と、幼児教育との円滑な接続を意識した小学校入学時の教育課程「スタートカリキュラム」を合わせ、幼児期と児童期の「学び」をつなぎます。

円滑な接続による効果

幼児教育と小学校教育が円滑に接続されることで、子供たちが安心して学校生活をスタートすることができます。さらには、主体的かつ意欲的に授業に取り組み、落ち着いて教育活動に取り組むことができます。

子供たちが、より楽しく、充実した学校生活に送ること、ひいてはより豊かな人間性と高い学力を身に付けることにもつながっていきます。

子供の視点に立って考える接続期

幼児教育と小学校教育のそれぞれのカリキュラムの編成や指導方法の違いについては、指導者の視点からだけではなく、子供の視点に立ってその違いを考え、理解していくことが重要です。

入学した子供が安心して生活できるようにするために、何が問題となっているのかを想定することが重要なポイントとなります。子供の入学当初に感じる不安を理解し、その気持ちに寄り添い、段差を乗り越えさえるための指導や支援をしていくためには、就学前までの園生活をよく理解することが大切です。小学校の教員が園での生活を理解することは、子供の気持ちを理解することに直接つながります。

園の保育者は、小学校での生活を十分に理解することで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に関する具体的なイメージをもち、就学までを見通した指導の実現につなげていくことができます。

2　接続期カリキュラムにおいて重視する点

子供の実態把握

カリキュラムを子供の実態に合った内容にしていくには、幼稚園・保育園・こども園の保育士・教員と小学校教員が互いの話を聞くなどして園や学校での子供の実態や発達段階に合わせた指導について理解し合い、それぞれのカリキュラムに生かしていくことが大切です。

・訪問や参観の際に子供の姿に関する情報共有や指導の在り方に関する意見交換を行いましょう。実際の指導の様子を見ることで、生活リズム、環境構成、教職員の関わり方等、教育の考え方や子供の発達や学びの姿を理解することができます。

・引き継ぎによる情報共有をした際には、カリキュラムを子供に合わせて随時更新していきましょう。

・小学校では、指導の過程や子供のよさが記された園の要録等から一人一人の実態を把握し、指導につなげていきます。

・支援や配慮の必要な子供については「子供のよさを伸ばす」という視点で引き継ぎを行い、支援をつないでいけるように体制を整えていきましょう。

自校園の全職員による共通理解

カリキュラムを作成する際には、その方針や自校園の職員の関わり等を明確にしておくことが大切です。作成したカリキュラムの実施計画は、職員会議等で周知し、校園長のリーダーシップの下で全職員がねらいや実施体制等について共通理解できるようにしましょう。

・多くの職員が関わることで、より個に応じた対応をすることができます。多面的に子供を見取ることで配慮や支援の必要な子供の実態を把握し、その後の指導や支援の充実につなげていきましょう。

・指導者同士が互いの指導の仕方（話し方、声の掛け方など）を見合い、指導の方向性を揃えていきましょう。また、配慮を必要とする子供の指導や支援について共通理解を図りましょう。

・全職員で子供のよさを見付けるように心掛け、個々の子供の自己発揮を支えることにつなげていきましょう。また、子供の実態に合わせて計画を柔軟に変更させていきましょう。

保護者との連携

保護者には、カリキュラムが小学校生活のスタートを円滑にするためのものであることを説明していきましょう。（カリキュラムの意義や考え方、ねらいなどを全職員で共通理解しておく）

・カリキュラムのねらいや活動内容を（保護者会、保護者面談、説明会、学校園便り等の機会において）伝え、保護者の不安を軽減していきましょう。

・カリキュラムの実施計画に基づいた活動を積み重ねてきたことで、子供が園や学校での生活を楽しく送れている様子について、保護者に具体的に伝えていきましょう。

・保護者がカリキュラムによる育ちや学びの価値を理解できるように、子供が興味や関心をもって遊びや学習に取り組む様子をエピソードで語るようにしていきましょう。保護者が家庭においても育ちや学びの過程を大切にしていけるように、意識の変容を促していきましょう。

多様なニーズに応える支援の充実

幼稚園や小学校では校園内委員会が設置され、特別支援教育コーディネーターが指名されています。保育園については、区の関係部署、相談機関、関係諸機関との定期的な連絡会が行われています。また、区では乳幼児期からの療育上の相談を保護者や園から受け、児童精神科、小児神経科の診療・相談・指導のほか園への巡回相談を行っています。

・幼稚園・保育園・こども園では保護者との話し合いを重ねていきながら、状況に応じて小学校への就学については個別の教育支援計画の引き継ぎとなる「就学支援シート」などを活用し、円滑な就学を保障していくように、家庭と小学校との確実な連携をしていくことが大切です。

・引き継ぎに当たっては、どの情報をどう引き継ぐかを、保護者と十分に相談することが大切です。保護者の不安や願い、就学前施設での指導内容等を小学校へ伝えていきましょう。小学校は受け取った情報を踏まえ、保護者と相談しながら指導に生かし、切れ目のない支援を行っていくことが大切です。

さらに、多様化、複雑化する子供を取り巻く環境、国際化などによって生まれた課題に対応していくことが必要とされています。日本語指導の必要性など、多様なニーズを十分に把握した上で、一人一人の可能性を伸ばしていく配慮をしていきましょう。

接続期カリキュラムを実践していく上で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に関してそれぞれの子供の姿を捉える場合においても、個々に発達の特性があることや、「気になる行動には理由があって困っているということ」等の視点をもち、障害の有無に関わらず、一人一人を大切にする支援を心掛けていくことが大切です。

接続期カリキュラムの評価と改善

評価に当たっては、学校園内だけではなく、様々な立場の方からカリキュラムの評価を受けて改善を目指すことが重要です。授業参観等では保護者から感想を得る機会を作ると、児童の様子の変化、成長を共に喜び合うことができます。

・改善点を次の指導に即座に生かすために、日々、実践と評価、改善を一体的に同時進行で行います。子供の姿から実践を評価し、必要に応じて速やかに改善し、次の日からの指導に生かしていきましょう。

・カリキュラムに関する記録、ビデオ、写真、掲示物などはデータベース化して共有します。日々の実践を振り返り改善するときにも大事であるとともに、次年度のカリキュラム編成の際の貴重な資料となります。今年度のカリキュラムを検証し、蓄積した資料を基に、次年度の子供に合うカリキュラムに改善していきます。

接続期カリキュラムの推進に当たっては、ＰＤＣＡサイクル（計画・実施・評価・改善）の考えに基づき、次年度の幼児期の全体的な計画や教育課程を作成する際には、各園、学校における実施状況、効果、課題等について、点検、評価を行っていきます。

保育･教育の実施については、学校園の評価や教育委員会の専門家スタッフなども訪問し、子供たちの育ちについて接続期カリキュラムの視点からの検証を進めていきます。